

## 韓国における「国際」的で「学際」的な学士課程の展開

嶋内佐絵



# 韓国における「国際」的で「学際」的な学士課程の展開

嶋内佐絵\*

## 1. 問題の所在および研究の目的

世界のあらゆるものがグローバル化への対応を迫られる中で、高等教育が果たす役割も変容しつつある。各国のフラッグシップ大学を中心とした高等教育の国際化や、非英語圏の大学における教育の「英語化」(Englishization) (吉野, 2014; 嶋内, 2016; Earls, 2016) という大きな潮流に加え、近年ではリベラルアーツの世界的復興や、国際教養 (International Liberal Arts), グローバル・スタディーズなど、国際的な側面を含め、多様な専攻を横断する形で作られる学士課程教育プログラムの増加が報告されている (Altbach, 2016; Jung et al. 2016; 山崎, 2016)。日本や韓国においても、大学は海外からの留学生を含め、これまで以上に多様な学生を包有するようになり、大学教育の国際化や英語化は、国内外から学生を獲得するための重要な戦略になっている。大学では、国際社会で競争力を持つスキルや能力を育成することだけでなく、グローバル社会の重要な課題に対し、学問領域の壁を越えて、柔軟な思考と適切なりサーチデザイン・研究方法を用いて包括的・総合的に取り組むことが求められるようになり、そのなかで少人数制やアクティブラーニング、広範囲の専門分野を含む学際的 (interdisciplinary) コース、入学後の専門の決定などを特徴とした教育プログラムが増加している (Lewis, 2012)。

これまで日本や韓国を含め多くの大学では、伝統的に一つの専門分野 (例えば政治学や法学, 文学, 工学など) が学部という単位を形成し、体系だった専門教育を行ってきた。各専門分野は、「現象・仮定・認識論・理論・方法」などの特徴的要素を持つことで他の分野から区別され (レプコ, 2013, 5頁), 少なくとも学部という大枠ではそれが混ざり合わないのが一般的であった。しかしグローバル化の深化する社会で、感染症や環境問題等を含め、既成の学問 (専門分野) では扱いきれない広範で複雑な問題や状況に人類が直面している中で、専門分野の知識を利用し、統合し、包括的に取り組むための学際研究 (Interdisciplinary Studies) やそのための学際的な学びが注目されてきた。レプコ (2013) ではその例として、環境科学, 分子生物学, 心理言語学, 文化研究, 女性研究などをあげ、このような新しい学問が人文学・社会科学, 自然科学など枠を超えて、発展・拡大していることを指摘している。

先行文献では、「学際性」・「学際研究」と混同される概念として「多専門性」・「多専門研究」を挙げ、前者を「スムージー」、後者を「サラダボール」に例えて説明している (レプコ, 2013,

---

\*東京都立大学国際センター准教授

15-18頁)。この比喩を日本や韓国のケースにおいて一般的に学部単位で行われている学士課程教育に当てはめてみると、地域研究や紛争研究、メディア研究といった学際研究を行う「スムージー型」、学部の中に複数の専門分野（多専門性）が存在し、学生の自由な専攻選択と専門横断的なアプローチの研究を促す「サラダボール型」、また学部のなかに学際研究と専門分野の双方があり、上記の2つの「混合型」の3つのモデルが存在することが予想される。

上記のような学際性、多専門性を持った教育課程は、国際化と極めて親和性が高く、その「学際性」と「国際性」は、質的な側面に関してもその深度に関しても、各国の社会的文脈や要請を反映しながら展開・拡大し、多様な広がりを見せている。たとえばオランダでは、2000年以降、医学等を含む多様な専門分野を含んだりベラルアーツ&サイエンス教育を英語で行い、留学生を多く集めるユニバーシティカレッジ（University College）が13の研究大学のうち10校で展開され、その半数は2010年以降に新設されている。日本においても国際教養学部や国際学部といった国際性をアピールしつつ、多様な学問領域を含んだ学部が増加しており、これらの学部は地域や大学の特色を反映して様々な特徴を持っている（嶋内、2017）。

韓国の高等教育における国際化の特徴は、工学や化学、医学などいわゆる自然科学分野のみならず、人文・社会科学系においても、英語を教育媒介言語とした教育・研究の展開（以下、英語化）が盛んで、英語が韓国の国家的競争力を上げるための極めて重要な要素と考えられている点である（Baca, 2011; Kim, 2017; Park, 2009他）。韓国の大学進学率がユニバーサル段階に至ったのは1995年とアジアで最も早く（馬越、2004）、金泳三政権下の世界化政策にはじまり、Study Korea Project（発展方案・推進計画等）・留学生誘致拡大方案、教育国際化力量認証制などの導入（塚田、2017）、ワールドクラスに押し上げるための国際的競争力強化、北東アジアにおける地域的な高等教育ハブ構築など（太田、2010）、大学の国際化政策が政府主導で次々と行われてきた。

そのなかでも大学教育の英語化は、ソウル大学を筆頭としたエリート大学から地方に位置する大衆的な大学まで、多様な大学で幅広く展開されており、既存の人文・社会科学系学部に加え、文系の学問分野を学際的に網羅し、英語で国際的な視野からグローバルな課題を学際的に扱う国際学部<sup>1)</sup>や国際大学院などの専門大学院が様々な大学に設立されている（嶋内、2016）。背景には、韓国人学生の海外留学生数は最近10年間で20万人から25万人の間を推移し、留学生受け入れの約二倍の韓国人学生が海外で学んでいること、優秀な学生の海外進学（頭脳流出）や、大学教員に海外（特に米国）の大学の博士号取得者が極めて多い（石川、2018）ことなど、韓国国内の大学で提供する国際的で質の高い教育機会の提供や「内なる国際化」（Knight, 2004）が課題となっていることが挙げられる。

韓国は日本と同様、アジアの非英語圏であり、少子化や若年層（後期中等教育修了生）を対象とした均質性の高い学生母体と熾烈な受験戦争、「大学全入時代」と言われて久しい高等教育へのユニバーサルアクセスや、巨大化した私学セクター、国内大学の明確な序列構造、また企業の多くが新卒一括採用を行う就職活動や、卒業後の労働市場において、どの大学を出たかという「学校歴」（竹内、2016）が大きな意味を持つ社会である日本と同様、雇用可能性において出身大学の社会的名声が重要視されていることなど、共通する特色を多く持つ。また国内においても、少子化を背景

として、首都圏のエリート大学に学生が集中し、地方に位置する私立大学が合併や閉校といった危機に晒されるという、国内大学間格差の問題も抱えている (Yonezawa & Kim, 2008)。

また、国家の教育政策の下で行われる中等教育と、留学生の受け入れや国際的な研究活動など、よりボーダーレスな環境にある大学院（修士課程以降）とのほごまで、学士課程教育はナショナルな文脈で育ってきた学生を主な対象としつつ、大学院やグローバル化する国内外の労働市場との間の接続の役割を果たしている。その意味で、学士課程教育での「国際」性や「学際」性を標榜する新しい取り組みがどのような意味を持っているのかを検証するのは極めて重要である。さらに、韓国は約20年前、より積極的な留学生や外国人教員の受け入れなどを通じた高度な「国際化」と、世界の主要経済に仲間入りするため「学際性の涵養の必要性」を勧告されているが (OECD, 1998, pp.139-140)、ここで示される「国際」性と「学際」性は、それらを実際に教育課程の中に組み込む各大学によって、異なった解釈と実践が行われていると考えられる。本稿は、韓国の学士課程において、近年全国的に広がりつつある「国際学部」という枠組みに焦点を当て、そこでは「国際」と「学際」がそれぞれどのような意味を持って展開されているのか、事例研究を通してその実態と特徴を帰納的に明らかにするものである。

## 2. 研究方法

先行研究では、欧州やアジアにおけるリベラルアーツの再興や新たな展開に表象されるように、これまでの専門教育志向の学士課程教育とは異なった流れが、大学教育の国際化と共存する形で生まれていることが指摘されている (Altbach, 2016; Godwin, 2015; Wende, 2012)。韓国では、このような流れが近年数多くの大学で開設されている「国際学部」等の学士課程教育に見られており、一学部の中に様々な学問分野を包有しながら、「国際」的であることを標榜しつつ展開されている。

本研究では、まずは第一段階として「国際」的で「学際」的な学士課程教育の展開の全体像の把握のため、韓国における全ての国際・グローバル系学部に関するデータの収集を行い、第二段階として、2大学3学部の事例研究を行った。まずは「国際」および「グローバル」というキーワードと、専門に特化した教育課程「以外」という広い定義の元にその全体像を把握していく手法をとる。第一段階では、韓国の教育省による『大学アルリミ』(大学情報データベース)の全大学リストから、国際的かつ学際的な学士課程教育(学部単位)を抽出した。具体的な手順として、まずは国際性を明示させた教育プログラムとして学部名に「国際」および「グローバル」というキーワードを含んだ学士課程教育を学部単位でリスト化し、名称別にカテゴリー分けをした。次に、『アルリミ』の全大学リストのなかから学術的な専門分野を掲げた学部(例えば法学部や文学部、工学部など)を削除し、韓国語で「国際」「グローバル」のどちらかを含まないが、学際的な教育を行っている想定される学部(例えば英語名の学部や、今回の調査対象には含まないが、自由専攻学部や公共人材学部など非専門分野の学部)を追加し、全体像の把握を試みた。

その後、かつ「国際」性と「学際」性を同時に兼ね揃えた教育課程として最も数が多く、地方からソウル、エリートからマスレレベルまで多様な大学に存在する「国際学部」(事例研究を行う前の

2018年度時点で25校)に焦点をあて、各大学・学部のウェブサイト内から以下の調査項目に関するデータを収集した。具体的には、調査対象学部のカリキュラムおよび教育内容・方法(専攻やカバーする学問領域、教育媒介言語など)に関するテキストデータを抽出し、加えて、創立年、留学生数・割合、外国人教員数・割合といった数値を中心としたデータの収集と整理も併せて行った。

第二段階の事例研究では、2018年1月に韓国の2大学3学部への訪問調査を行い、各学部で創設から深く関わっている教員(学部長2名、副学部長1名、講師1名)および職員(2名)へのインタビュー調査を行った。事例として選んだのはソウル中心部にあるA大学校(エリートレベル、ソウル)国際学部およびグローバル系学部の2学部、B大学校(マスレベル、地方)の国際学部である。これら2大学は、韓国の大学がその学生母体や大学としての特色に大きな影響を受ける地理的条件(首都圏・地方)および入学時の選抜度(エリート大学・大衆的な大学)を選定基準とし、それぞれの特徴を持つ大学を選択した。インタビューは、各学部で1時間から1時間半ほど、すべて英語で行われ、許可を得たのち録音し、日本語による書き起こしを行った。本論の分析では、先行研究や各大学および政府関連機関、新聞など韓国メディアからの情報を参照しつつ、上記のプログラムデータとインタビューデータを並行して考察することにより、国際的で学際的なプログラムの全体像と事例を通じたミクロレベルでの実践や特徴・課題等を描き出すことを試みた。

### 3. 分析のための枠組み

本研究では、韓国における国際性と学際性を併せ持った学士課程(国際学部など)を分析する枠組みとして、国際化のパラドックス(国際化における異なった二つの方向性の共存)と国際化における階層化(大学間格差)という二つの分析視点を用いる。

まず一つ目は、国際化の包有する二面性である。江淵(1997)は、日本における国際化の意味を「自動詞としての国際化」と「他動詞としての国際化」に分けて論じた。前者は日本が国際的に受け入れられるような存在になるにはどうしたら良いか、という「“大国”に合わせていくことを余儀なくされた“小国”の国際社会への参加過程から生まれて来た概念」とし、後者は他者(=目的語)に対して働きかける動作で、国際秩序のなかで“覇権”を持つ国家から生まれた歴史的概念であるとした(江淵, 1997, 40-45頁)。また Shimauchi (2018) は、国際化の二つの方向性を「自己変革の国際化」と「自己拡大の国際化」と整理し、前者は「自動詞としての国際化」(江淵, 1997)と近く、後者は日本の文化や教育・研究を対外的に拡大・展開していくという意味での国際化であると指摘し、例として日本政府による Cool Japan 政策や国際日本学等の展開などを挙げている。

韓国の大学における国際化に関しても、Moon (2016) は、留学生と韓国人学生双方へのインタビューを通じて、民族的ナショナリズムの概念がカリキュラムレベルにおいても学生同士の交流においても根深く定着していることを指摘している。本稿では、「国際」性を教育における重要なビジョンと実践に位置づけている国際学部において、果たして「国際」性が一体何を意味しているのか、上記の枠組で見られるようなパラドックスに注目して分析していく。

もう一点は、教育の国際化における階層化(エリート・マス格差)の視点である。De Wit &

Jones (2017) は、国境を超えた学生移動が世界的に拡大する中で、その恩恵に預かっているのは特権的な機会を持つ一部のエリートだけであり、99%の学生はその恩恵から外れていることを例に挙げ、国際的な学生移動のエリート主義的な様相を指摘した。韓国では、学校間の格差や家庭および地域社会において社会的不平等が存在していることがかねてより問題視されており、その不平等が世代を超えて継承されることへの抑制が重要な政策課題とされてきた（韓国教育開発院、2006）。また、大学においても深刻な学歴インフレ傾向により国公立、私学両セクター内に威信の序列構造が形成され（馬越、1995）、大学ランキングとして一般的に共有されているその序列は学生の受験行動にも大きな影響を及ぼしており、少子化を背景とした地方の大学での定員割れが深刻化している（太田、2010）。このような格差は教育の国際化においても同様に進展しており、ソウル（首都圏）と地方との国際化格差拡大が問題視され、地域単位での国際化推進のため「留学生交流拠点整備事業」や「教育の国際化特区指定推進計画」を通してその是正が行われてきた（佐藤、2013）。

このような背景を踏まえ、本稿では韓国国内で一般的に流通している国内大学ランキングを韓国における大学の序列構造の作業上の指標として用いる。韓国国内の大学ランキングとして、94年より4年制大学を対象とした大学評価を行っている中央日報の最新ランキング（中央日報、2017）を用い、1位から15位までを「エリート」、30位までを「中堅」、31位以下を「マス」レベルの大学と呼称する。

#### 4. 「国際」的で「学際」的な学士課程教育の全体像と事例

まず「国際」性と「学際」的な側面を持つと考えられる教育課程の全体像の把握のため、『大学アルリミ』からの該当学部を抽出すると、国際学部25校、国際自由専攻学部1校、グローバル学部2校、グローバル自律学部3校、グローバル融合（創意）学部2校、グローバル人材（リーダー・エリート）学部5校、グローバル教養学部1校など計39学部があがった。これらの学部は、大学の序列構造および地理的範囲の双方で、広範に広がっている。たとえば国際学部は25校のうち7校がエリート大学に、5校が中堅大学に、13校がマス大学に存在する。地理的にも全国的な広がりを見せており、首都圏（ソウル）と地方にほぼ同数の国私立大学に開設されている。

今回事例研究を行ったB大学は地方の大都市に位置するマスレベルの私立総合大学であるが、キリスト教のミッションナリーによって設立され、元来「国際性の高い大学」であり、国際系学部の設立当初、グローバルなテーマで英語での教育を行う学部の設立は、これらに関心の高いその地方の韓国人高校生に対してマーケット戦略上効果的であるという目論見があったという。そのため、国際ビジネスと国際関係学をカリキュラムの核とし、当時の学長のリーダーシップの下、すべての専任教員を外国人教員とし、学生への授業料免除や多様な奨学金など、経営的にも大きな挑戦の中で国際系学部を新設した。現在でも国際系学部はB大学の広告塔的な役割を果たしており、その地方の高校卒業生で国際的な教育に関心のある学生に加え、海外経験の長い帰国生や正規留学生も受け入れている。一方、インタビューによれば、B大学は他の地方からの学生募集は難しく、近年

では同地域からの学生募集にも苦戦しているという。英語ができて優秀な学生のソウルへの流出は深刻で、入試上位の学生の90%がソウルへ、残りの10%がB大学国際系学部に進学するという状況で、入学後も毎年数名の学生がソウルの大学への編入を希望して退学するという。また、この国際系学部では、一時期理系の学問分野を取り入れようとIT関連の専攻を導入したが数年後廃止したという過去がある。その理由も学生募集の難しさにあり、英語と数学の双方ができる理系の学生であれば、国際系学部を選ばず、医学部に進学するケースが多いということだった。事実、韓国における国際・グローバル系学部の専門のほとんどは、人文・社会科学系に偏っている。

A大学、B大学を含め、「国際学部」という名称で全国に多く展開されている学部は、最も早いものでは1990年代前半、多くの大学は2000年以降に設立されており、グローバル化が深化する中で存在感を増してきた学士課程教育プログラムである。国際学部で行われている教育を見ていくと、多様な学問領域を扱っている中で、特に以下の3の特徴を持つ。一つ目は国際政治、国際経済、国際関係、国際通商、国際貿易、国際ビジネス、国際協力など、本質的に国際的な現象を扱う学問が複数存在しており、その中でも「国際ビジネス」「国際通商」、「国際関係」の3つが最も多くの国際学部で提供されている。二つ目は地域研究で、特に中国、日本、東アジア、アメリカなど、韓国にとって政治・経済的、社会・歴史的にもつながりの強い地域の地域研究が提供されている。地域研究はそれ自体が学際研究であり、英語ではArea Studies, Regional Studies, Cultural Studies, Language and Cultureなど様々な表記がされているが、上記にあげた各地域の社会・文化・言語に関する教育が中心で、特に中国・日本に関しては中国語や日本語を体系的に学ぶ機会が提供されている。例えばA大学の国際学部では、欧州からの留学生を意識し、韓国を含めた東アジア地域について学べる地域研究の専攻としてEast Asia Studiesを用意している。三つ目は、主に外国人留学生や海外同胞（韓国系米国人や在日韓国人など）を主なターゲットにした韓国研究（Korean Studies, Global Korean Studies）の提供である。前者2つの特徴が、主に韓国の高校卒業生（韓国人学生）を対象とし、彼らがグローバル社会に対応し、競争力を持つための知識の習得を目指す教育であるのに対し、後者は海外からの学生を対象とし、韓国の言語・文化・社会等に対する知見を持つ「知韓派」や、将来的に韓国の産業で働き、韓国社会に貢献する人材、海外と韓国との通商で活躍する架け橋的人材の育成を目指すものと捉えられる。

同様に、グローバル系学部では、グローバルというキーコンセプトが人材・リーダー、融合、自由・自律、教養など様々な言葉と組み合わせて使われ、ASEAN地域学、インド地域学、中国地域学などアジアを中心とした地域研究やグローバル融合産業工学やグローバル人文経営融合・複合など、各専門分野を国際的な視野で学際的に取り組む学部にも使われている<sup>2)</sup>。

A大学において、国際学部が過酷な選抜を経てきた国内学生を対象とし、全て英語で行う学士課程教育になっているのと対照的に、グローバル系の学部は、既存の他学部において韓国語で学ぶ留学生や12年以上海外生活をしてきた韓国人帰国生が、韓国語での学修に困難を抱えるケースが多く、彼らへの教育上の対策として開設された。2015年開設当初の使命は、韓国語の鍛練と韓国の大学システムへの適応をサポートすることであり、現在は韓国学・韓国研究、メディア研究を主な専攻とし、国際学部であげた特徴の三つ目を独立した学部で行なっているといえる。在籍学生は留学



生および韓国系の在外同胞であり、特に日本と中国はリクルートのメインターゲットで、在籍学生には最低でも3つの言語（韓国語と英語に加え、日本人であれば中国語、中国人であれば日本語）などを学ぶように奨励していると言う。専門としては韓国研究、韓国語・韓国文化教育、メディア（韓国文化と広報）、国際通商、国際関係など韓国に関連する分野を中心に、学際的なカリキュラム構成になっている。A大学グローバル系学部では、このような留学生を「ブリッジ人材」と呼び、将来的に韓国社会や韓国とその留学生の出身国をつなぐ、政治的・経済的・社会的な人的資源の育成として位置づけている。

以上のように、韓国の国際的で学際的な学士課程教育においては、国際化やグローバル化といったビジョンのもとに、海外からの学生に対する韓国研究が位置付けられ、自国の文化・言語・教育等を広げていく、という意味の「自己拡大としての国際化」が行われている。ここでも、国際性が内包するナショナルな志向性が示唆されている。

## 5. 「学際」性に関する考察

韓国の学士課程教育は、欧州で広く行われている早期専門教育（early specialization）型が一般的あり、専門ごとに分かれた学部単位で入学者の選別が行われる。しかし今回の調査で、学際系の学部の中には国家公務員などを目指す学生を対象とした公共人材の育成を行う学部も拡大しているなど、学際的な教育の提供は韓国の大学で広範囲に渡って取り組まれており、人文社会科学、自然科学の垣根を超えて、多くの新設学部が「学際性」をその特色としてあげていることが分かった。学際性だけに注目してこれらの学士課程教育を見ていくと、「融合」「連携」「人材」「創意」「自由」「自律」等のキーワードが極めて多義的に、かつ多様な組み合わせで使われ、伝統的な専門分野を超えた学際的な教育課程が形成されている。分野を横断する学問のあり方と教育の提供は、「国際」的側面と合わせて韓国の大学に求められる。

特に韓国に特徴的な現象としてあげられるのは、2009年以降、ロースクールの設立と既存の法学部の廃止に伴い、各大学の定員確保を背景に新設された「自由専攻」もしくは「自律専攻」と呼ばれる学部の急増とその急激な減少である<sup>3)</sup>。多くの自由・自律専攻学部では、1年間の自由な科目選択のあと専攻を決めることができるが、学生の多くがビジネスや経営学といった専攻を選択するという偏りが生まれ、入学の入り口としての自由専攻学部と、2、3年次以降専攻の教育を提供する既存の学部の接続に関する制度的な難しさが明らかになった（連合ニュース、2016；韓国大学新聞、2017）。

上記に挙げたような学際的な学部における学生の専攻選択の偏りは、国際学部の一部でも起こっている。A大学国際系学部では、1年次に共通教養を履修した後、2年次から学生の選択する専門教育を履修するが、16ある専攻のうち、特に経済学、国際政治、創造的技術専攻など特定分野の定員オーバーにより、学生が希望する授業を履修できないなどの問題も起きている。特に、国際経営や国際経済といった卒業後の就職に直結すると考えられている分野に人気が集まる傾向があり、マズレベルの大学では、これら学生に人気のある専攻のみを扱った学部が大部分を占める一方、エリー

ト大学ほどより多様な専攻を持ち、学際的な学問を扱う傾向にある。

韓国における国際学部では、学際的な学びを強調する一方、各大学で時期は異なるが、入学時から、もしくは2年次から自身の専攻（メジャー）を選択するのが一般的である。これは、韓国の学士課程教育において、卒業後の職業と直結する専門性の獲得が非常に重要視されているためである。たとえば、私立のエリート大学であるA大学国際学部は、アメリカのリベラルアーツカレッジをモデルにして設立されているが、学部教育では「専門性の獲得」を強調している。前述したように、現在欧州やアジアを中心に多くの大学で再興するリベラルアーツ教育は、古代ギリシャをその起源とし、ローマ時代後期に「自由七科」として成立してから現在に至るまで、人文・社会科学から自然科学までを網羅した学際的な科目の提供や、批判的思考の重視、少人数制、市民性の育成や全人教育など、時代や国を超えて共通する理念や方針を持っている（大口，2014；Wende，2012）。上記のような理念は、国際学部の基本的なビジョンとも共通する部分が多いが、国際学部がリベラルアーツカレッジをモデルとしていても、学部が「リベラルアーツ」という概念を前面に出したり、学部名に入れたりする事例は極めて少ない。その理由として、国際学部の最大の「買い手」である学生の両親は、教育への関心も高く、リベラルアーツの意味やその教育的価値を理解する一方、韓国国内での就職可能性を高める専門性の獲得や、英語力育成の側面を最も重要視していることがあげられるという（A大学学部長へのインタビューより）。

全体として、韓国における国際的で学際的な学士課程教育では、学生の自由で多専門的な学びを奨励しつつ、多くの大学がメジャー、ダブルメジャー制度を導入し、基本的には確固とした専門性を身につけることを目指した「サラダボール型」（レプコ，2013）の学際性をベースとしつつ、その中には、地域研究、韓国研究など「スムージー型」の学際研究とその教育が共存した、混合型のカリキュラムとなっている。

## 6. 「国際」性に関する考察 — 教授媒介言語・学生・教員に注目して

韓国では、中央日報の発表する国内大学ランキングで、大学の国際化の指標として英語による教育（English-medium Instruction, 以下EMI）の導入率が使われている（Pillar & Cho, 2013）。このように、大学教育の国際化に関して、誰（学生）を対象に、誰（教員）が、何語（英語・韓国語・その他）で教えるか、という点は、国際化を測る指標として根本的かつ重要な問題である。EMIは政府主導の権威的なアプローチによって導入されており、学や教員の言語や教育能力への十分な配慮や相談も行われておらず、その非民主的な導入も問題視されてきた（Kim, 2017）。

本調査によれば、国際学部25校のなかですべての講義をEMIで行なっているのは8校、EMIと韓国語による教育が混在しているのが7校で、あとの10校は基本的に韓国語による教育を行っている。EMIの導入に関しては、エリートからマスまで幅広い大学で行われている一方で、エリートレベルの大学でも学生・教員の不十分な英語能力による不満足や講義レベルの低下、教育指導上の問題が指摘されている（Byun et al., 2011; Kim, 2016）。マス大学であるB大学の国際学部では、国際学部での教育スタイル（少人数制やインタラクティブな授業）や英語での教育に追いつけず、

毎年数人が他の大学に転学する、英語そのものには関心があるが、社会科学の学問そのものには関心がなく、専門を学ぶのに問題を抱える、といった問題が報告されている。また、韓国の就活市場において英語力そのものの価値は低下しているとし、「英語を話せるだけではもう韓国で職を得る見込みがない」ため、学生にはダブルメジャーかマイナーメジャーで経済学かビジネスを学ぶように奨励しているという。

このような状況は、同時にエリートとマス間の教育内容の格差ももたらしている。EMIの場合、学生たちの持つ英語力によって展開できる授業内容もレベルも変わってくるため、特にマスの国際学部で英語による授業を行う際には、充実した英語教育が不可欠である。事例からも、B大学国際学部では言語能力や文化の違いなどから、国内からの進学者と在外韓国人・留学生の間に壁が出来ていることを問題視し、クラスTAやスタディーグループの奨励などを通して英語力の向上とコミュニケーションの活性化を図る試みを行なっている。他方、エリート大学で、「サラダボール型」と「スムーズ型」の混合型の学際プログラムとして幅広い専門領域を持つA大学国際学部においても、学生間の英語力格差は大きく、全体の7割を占める国内進学の韓国人学生のなかには高いGPAを維持するため、英語での授業を避けようとする学生も少なくないとのことであった。

国際指標の一つである外国人教員の割合に関しては、B大学のようにほぼ全員が外国籍の教員の学部もあれば、ソウル市内にあるエリートレベルのとある国際学部のように数人を除き9割近くが韓国人教員の学部もあり、エリート、マスといった枠組みでその傾向を整理することは不可能である。ただ、教員の「国際」性は国籍だけで判断できず、海外学位（特に米国における博士号）が重要視される韓国で、エリートレベルの大学ほど海外学位取得者が多い傾向にある。たとえばA大学国際学部では、専任教員の半数以上が外国人教員であり、韓国人教員も含めて9割以上は海外（特にアメリカ）の大学の博士号取得者である。外国人教員のなかでも、英語教育の専門家ではなく、国際関係学や社会学、歴史学などの博士号をアイビーリーグで取得した教員を有しているのも、少数のエリート大学もしくは国際的なネットワークを持つキリスト教系大学の特色である。一方マスレベルの大学では、学生の言語に関するレディネスの差異を背景に、英語教育の専門家としての外国人教員の割合が高い傾向にある。韓国では韓国人教員の採用に関しても英語で授業を行えることを条件とするのが一般化しているが、特に人文社会科学分野の専門性を持った外国籍の教員採用に関しては、既存の学部との間に緊張関係が生まれるような問題も起こっているという（A大学国際学部）。

最後に、国際的で学際的な学部で学ぶ学生の様相に関して、大学全体や学部単位による正確な留学生数や割合は多くの大学において公開されておらず、正確な数字を把握するのは不可能である。しかし、A大学グローバル系学部など留学生を主な対象とした一部の学部を除き、多くの大学の学生は韓国の高校の卒業生（国内進学の韓国人学生）である。ソウルのエリート私立大学で国際的な知名度も高いA大学国際学部でも、留学生の割合は3割ほどで、在籍学生の多数は韓国の高校から進学した国内学生である。B大学国際学部では、正規の留学生は数名のみだが、毎年多くの交換留学生が学んでいる。前述したように留学熱の高い韓国では、大学の提携する協定校（特に英語圏）への交換留学は圧倒的人気であり、逆に海外からの交換留学生を受け入れるためには英語による授

業の提供が不可欠である。特に EMI で教育を提供する国際的で学際的な学部は、全学における交換留学生受け入れ先としての役割も担っている。

## 7. おわりに

これまで研究がなされてきたアジアにおけるリベラルアーツカレッジの復興は、中国やシンガポールの例に見られるように、国内序列構造の中で高い選抜度を誇る大学での展開や世界的なエリート大学との連携のなかで見られるエリート主義的なものであった (Godwin, 2015; Pickus & Godwin, 2017; Lewis, 2012)。また他地域においても、たとえばオランダの University College は、「オランダは中間層と弱いバックグラウンドから来た学生の支援には強いが、トップ層の育成には弱い」(Redden, 2013) というこれまでの課題を背景に、平等主義的な高等教育からより差別化・卓越化を図り、幅広い学問的素養と異文化コンピテンスを身に付け、卓越した英語力を持つ「エリート」(グローバルリーダー) を育成することを目的に展開されているものであった (Bog & Wende, 2016)。

一方、韓国における国際的で学際的な学士課程教育の展開と拡大は、国内の序列構造のなかでもエリートからマスのレベルの大学まで多様な大学で提供されており、国際的資質とグローバル社会への対応力の育成という世界的に共通する課題は共有しつつも、少子化時代の学生募集戦略と強く結びついて拡大している。さらには、韓国社会における強い英語熱を背景とした英語による教育 (EMI) の需要 (嶋内, 2016)、自由 (自律) 専攻などを含め、優秀な学生獲得や定員確保を目的に、社会的な需要を読んだ学部の設置といった韓国社会独自のコンテクストを反映している。さらに、「国際」化と「学際」化の流れそのものは、大学の序列構造を縦断して開設されている一方で、その「国際」性と「学際」性のあり方には大学の序列構造や地理的環境によるグラデーションがみられた。

本研究調査を通じて、国際学部などの国際的で学際的な学士課程教育は、主に3種類の役割を持つことがわかった。まずそれらの学部の多くは韓国の高校の卒業生を対象としたものであり、卒業後の職業に直結した実用的な専攻 (ビジネス・経済系) や、中国や日本、アメリカなど韓国にとって貿易・政治・安全保障など様々な面で重要な国に関する地域研究が選ばれている。このような学部は「サラダボール型」もしくは「混合型」で多くの学びの選択肢を用意しているが、卒業後過酷な就職戦線に直面する国内学生たちにとっては、専門性を身につけられることが大きな魅力になっており、その点で修士課程への接続を前提とした欧州に広がるリベラルアーツの学士課程教育とは大きく異なる。このような国内学生の国際化教育は、江淵 (1997) のいう「自動詞としての国際化」の文脈で理解する事が可能だが、その目的は「世界へのキャッチアップ」(江淵, 1997) から、実践的な学問の履修による就職可能性の上昇や国際的資質としての英語の習得など、個人の社会的成功と結びついている。

次に挙げられるのが、初等・中等教育を海外で過ごした学生 (韓国の大学入学定員枠で「12年以上を海外で過ごした韓国人」の定義に入る学生) や海外同胞 (韓国系外国人) が、母国である韓国

へ「Uターン留学」する際の受け入れ先としての役割である。特に、将来的に韓国での就職を考え、韓国社会で人脈を築こうとする学生や、海外同胞のなかでも特に英語を母語とする韓国系アメリカ人にとって、英語で学べる国際的で学際的な学部は、多様な国際的背景を持つ学生の重要な受け入れ先となっており、さらには交換留学生の受け入れ先ともなり、韓国人学生の協定校への交換留学を制度的に支えるために不可欠の存在にもなっている。

最後に主に留学生を対象とした、韓国に関連する学問の提供という役割である。特に韓国語、韓国語教育学、韓国文化などを含めた韓国研究の提供や、メディア・映像制作など、韓国文化に関心の高い留学生が、韓国語を学びながら韓国に対する知見を高め、韓国での就職につなげられるような専攻や授業が、国際的で学際的な学部の中に含まれている。これらは在日韓国人や中国の朝鮮族などを含む海外同胞が、自らの民族的ルーツを知るための教育機会の提供ともなっている。

このように、韓国における国際的な学士課程教育の「国際」性には、大きく分けるとナショナルな人材（韓国人学生）の国際化教育と、韓国をよく知り、架け橋的役割を果たす国際人材（外国人留学生）の育成、という二つの方向性が共存しており、またその共存を可能にしているのがプログラムのもつ「学際」性であると言える。

本稿で見てきたように、韓国における国際的で学際的な学士課程教育は、エリートからマスまで幅広く、全4年制大学の約1割で展開されており、その取り組みは各大学やその大学が置かれた社会的コンテキストを強く反映している。本研究での訪問調査は2大学3学部限定されているが、今後他の大学の事例を見ていくことで、より多様な「国際」性、「学際」性のあり方が見えてくるだろう。このような国際性と学際性を併せ持った学士課程教育は、日本でも1991年の大学設置基準の大綱化以来、多様な形で展開しているが、その全容と実態は未だ明らかになってはいない。大学は、その歴史的事情や現在における諸機能からもすぐれて国際的性格の強い機関であると同時に、特定の国、国民、地域、地方の歴史、社会と隔絶して存在しえない存在でもある（喜多村，1984）。国際的で学際的な学部は、その時代や、各国のコンテキスト、様々な地域的・社会的背景を持つ大学が持つ課題や特徴を反映していると同時に、今後ポストコロナの各国社会と大学の状況を受け、変容を迫られる部分でもあるだろう。物理的な移動を伴う留学が難しくなるなか、本質的にその教育カリキュラムで学ぶすべての学生に国際的な経験の機会が与えられる国際化（Leask, 2015）のあり方を見直すべき時であり、これまでの研究や事例の蓄積を踏まえ、大学教育が提供できる「国際」性と「学際」性はどのようなものなのかを批判的に検討していく必要があるのではないか。

本研究は科研費（若手研究・18K13196）「国際的で学際的な学士課程教育に関する国際比較研究」（嶋内佐絵）の助成を受けたものです。

## 【注】

- 1) 韓国において大学は「大学校」、各学部は「大学」と呼称され、「国際学部」は韓国語で「国際大学（국제대학）」と呼ばれるのが一般的だが、ここでは大学名との混乱を避けるため「国際

- 学部」と記載する。英語では International Studies, International Studies and Area Studies, Global Studies, 英語で創設者の固有名を含むなど、多様な表記がされている。
- 2) A 大学グローバル系学部でのインタビューでは、「グローバルはすでに新しい概念ではない」という認識を持ちつつ、学部名にグローバルを掲げた理由として、「グローバルという言葉が政府からの認証を得る際、40・50代の人に響きやすい言葉である」ことをあげられた。
  - 3) 各大学の定員確保を背景に新設された自律（自由）専攻学部だが、多くの大学において失敗に終わり改組を余儀なくされている。このような学部は、2018年1月の調査時点で全国37校に存在したが、2019年度以降の改組や名称変更などを予定している学部も多く見られた。

## 【参考文献】

- 石川裕之（2018）「韓国における留学生送り出しの現況-2010年代以降を中心に」ウェブマガジン『留学交流』83（2018年2月号）日本学生支援機構。
- 馬越徹（1995）『韓国近代大学の成立と展開-大学モデルの伝播研究』名古屋大学出版会。
- 馬越徹（2004）「韓国の私学高等教育（上）ユニバーサル化への牽引車」『アルカディア学報』No.19, 私学高等教育研究所。
- 江淵一公（1997）『大学国際化の研究』玉川大学出版部。
- 大口邦雄（2014）『リベラル・アーツとはなにか-その歴史的系譜』さんこう社。
- 太田浩（2010）「韓国における留学生政策の発展とその課題」『移民政策研究』2(2), 20-39頁。
- 韓国教育開発院（2006）『KEDI 教育政策フォーラム：教育格差 何が解法なのか』。
- 喜多村和之（1984）『大学教育の国際化：外から見た日本の大学』玉川大学出版部。
- 佐藤由利子（2013）「教育の国際化における地域間格差の是正策 -韓国と日本の比較から-」『大学論集』第45集, 33-48頁。
- 嶋内佐絵（2016）『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換-大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較』東信堂。
- 嶋内佐絵（2017）「高等教育における『国際教養』教育の日本的展開と志向性」日本国際教育学会第28回研究大会発表資料。
- 竹内洋（2016）『日本のメリトクラシー 増補版：構造と心性』東京大学出版会。
- 中央日報 2017年大学評価（2017）(<http://news.joins.com/article/22038112>) <2020年8月18日アクセス>。
- 塚田亜弥子（2017）「韓国における外国人留学生受入の質向上に関する分析-外国人留学生誘致・管理力量認証制に着目して」『比較教育学研究』第54号, 日本比較教育学会。
- 文部科学省（2020）「平成29年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（令和2年4月28日）([https://www.mext.go.jp/content/20200428-mxt\\_daigakuc03-000006853\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200428-mxt_daigakuc03-000006853_1.pdf)) <2020年8月21日アクセス>。
- 山崎直也（2016）「日台高等教育における国際教養教育とグローバルスタディーズ教育の展開」『国

- 際教育』日本国際教育学会第19号, 154-157頁。
- 吉野耕作 (2014) 『英語化するアジア—トランスナショナルな高等教育モデルとその波及』名古屋大学出版会。
- レプコ, アレン・F 著 (光藤宏行・大沼夏子・阿部宏美・金子研太・石川勝彦訳) (2013) 『学際研究 プロセスと理論』(九州大学出版会)。
- 연합뉴스 '존폐기로' 자유전공학부...대다수 폐지속 이대 등 일부만 확대 (連合ニュース 「存廃の岐路' 自由専攻学部, 大多数が廃止の中で, 梨花女子大など一部のみ拡大」) (2016年6月13日) ([http://www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2016/06/12/0200000000AKR2016061204\\_8500004.HTML](http://www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2016/06/12/0200000000AKR2016061204_8500004.HTML)) <2020年8月18日アクセス>。
- 한국대학신문 Daily UNN '우후죽순처럼 생겼던 자유전공, 이제는 너도나도 통폐합' (韓國大学新聞 Daily UNN 「雨後の筍のようにできた自由専攻, もはや君も私も統廃合」) (2017年1月8日) (<https://news.unn.net/news/articleView.html?idxno=167737>) <2020年8月18日アクセス>。
- Altbach, P. G. (2016). The Many Traditions of Liberal Arts—and Their Global Relevance. *International Higher Education*, 84, 21-23.
- Baca, G. (2011). Critical Thinking and the Tide of Scholarly Bandwagons: Liberal Arts Education in the “Age of Globalization”, *Korean Journal of General Education*, 5(2), 181-203.
- Bog, D. K. & Van der Wende, M. (2016). Liberal Arts and Science Education for the 21<sup>st</sup> Century Knowledge Economy: A Case Study of Amsterdam. In Jung, I., Nishimura, M., Sasao, T. (Eds.) (2016).
- Byun, K., Chu, H., Kim, M., Park, I., Kim S., & Jung, J. (2011). English-medium teaching in Korean higher education: policy debates and reality. *Higher Education*, 62(4), 431-449.
- De Wit, H. & Jones, E. (2017). Improving Access and Equity in Internationalisation. University World News Global Edition, Issue 486 (As of December 8, 2017). Retrieved 31 August, 2020 from <http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20171206071138138>
- Earls, C. W. (2016). *Evolving Agendas in European English-medium Higher Education*, Palgrave Macmillan.
- Godwin, K.A. (2015). The worldwide emergence of liberal education. *International Higher Education*, 79, 2-4.
- Jung, I., Nishimura, M., Sasao, T. (Eds.) (2016). *Liberal Arts Education and Colleges in East Asia: Possibilities and Challenges in the Global Age*. Singapore: Springer.
- Kim, E. G. (2017). English Medium Instruction in Korean Higher Education: Challenges and Future Directions. In B. Fenton-Smith et al. (Eds.), *English Medium Instruction in Higher Education in Asia-Pacific*. (pp.53-69) Springer.
- Kim, S. K. (2016). English is for dummies: linguistic contradictions at an international college in South Korea, *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 46(1), 116-135.
- Knight, J. (2004). Internationalization remodeled: Definition, approaches, and rationales. *Journal of studies in international education*, 8(1), 5-31.
- Leask, B. (2015). *Internationalizing the Curriculum*. London and New York: Routledge.

- Lewis, P. (2012). In Asia, Future Appears Bright for Liberal Arts Education. *The Chronicle of Higher Education*. Retrieved 18 August, 2020 from <https://www.yale-nus.edu.sg/wp-content/uploads/2013/09/Chronicle-Blog-Post-Oct-25-2012.pdf>
- Moon, R. J. (2016). Internationalisation without cultural diversity? Higher education in Korea. *Comparative education*, 52(1), 91-108.
- OECD (1998). Reviews of National Policies for Education: Korea 1998. Retrieved 18 August, 2020 from [https://www.oecd-ilibrary.org/education/reviews-of-national-policies-for-education-korea-1998\\_9789264162969-en](https://www.oecd-ilibrary.org/education/reviews-of-national-policies-for-education-korea-1998_9789264162969-en)
- Park, J. K. (2009). “English fever” in South Korea: Its history and symptoms.’ *English today*, 25 (1). 50-57.
- Pillar, I. & Cho, J. (2013). Neoliberalism as language policy. *Language in Society* 42, 23-44.
- Redden, E. (2013). “Inside Higher Ed: Liberal Arts Go Dutch”. (As of 11 February, 2013). Retrieved 18 August, 2020 from <https://www.timeshighereducation.com/news/inside-higher-ed-liberal-arts-go-dutch/2001462.article>
- Shimauchi, S. (2018). “English-Medium Instruction in the Internationalization of Higher Education in Japan: Rationales and Issues”, *Educational Studies in Japan*, 12, Japanese Educational Research Association.
- Van der Wende, M. (2012). *Trend toward global excellence in undergraduate education: taking the liberal arts experience into the 21<sup>st</sup> century*. Research & Occasional Paper Series: CSHE. 18.12. University of California, Berkeley.
- Yonezawa, A. & Terri K. (2008). The Future of Higher Education in the Context of a Shrinking Student Population: Policy Challenges for Japan and Korea. In OECE, *Higher Education to 2030, Volume 1, Demography*, 199-216.



# **A Study on the “International” and “Interdisciplinary” Nature of Undergraduate Programs in Korea: A Case Study of an International and Global Studies Department**

Sae SHIMAUCHI \*

As the recent worldwide re-emergence of liberal arts programs can be considered as a response to the demands for so-called 21st-century skills, Korean universities also face the challenge of fostering students to have a much broader sense of skills and global perspectives. Universities in Korea have employed and innovated interdisciplinary education into their undergraduate programs alongside their internationalization strategy. This trend is extremely important to explore because actual practice of international and interdisciplinary undergraduate programs (IIP) at each institution may vary, reflecting the external forces and environment around specific universities. The objective of this research is to conceptualize and analyze how “international” and “interdisciplinary” education is formulated and implemented in undergraduate programs in Korean higher education. As an analytical framework, this research employs academic stratification between elite and mass-market universities. It also employs two dimensions of internationalization: one is the transformation of the self to be global competitive and to be recognized internationally, and the second is the dissemination of national contents including culture and language through education. The author firstly investigates the comprehensive picture of IIPs through examining a university database. Secondly, the author examines the educational visions, curriculums and international indicators of these programs in order to capture the comprehensive features, expansions, academic coverage and actual meanings of “internationalness” and “interdisciplinarity” in the context of Korean society. Lastly, this study conducted case studies in three programs at elite and mass-market universities. In the analysis and discussion, this paper firstly shows that IIPs are widely seen in both mass and elite universities in Korea. The typical IIP includes three characteristics in academic disciplines: a combination of numerous international related studies, Area Studies, and Korean Studies mainly targeting overseas students and Korean descendants. In conclusion, IIP in Korean higher education should be considered as a different phenomenon from the worldwide emergence of liberal arts education. The study also found different interpretations and practice in each institution according to their hierarchical position and regional circumstance. The functions of the programs have two dimensions. One is to educate Korean students to be globally competitive, and the other is to nurture international students who are in favor of Korean culture and society and who can work in and contribute to Korean industry in the future. Korean Studies for overseas students in the international and interdisciplinary programs implies the nationalistic dimension of internationalization of higher education. Meanwhile, its interdisciplinary nature allows the program to have a multi-vocality of “internationalness”.

---

\* Associate Professor, Tokyo Metropolitan University